

『変身』

—その深層について—

金子 琢 磨

1

F. カフカにとって1912年は決定的な転回点となった。長編小説『アメリカ』の着手と順調な進捗、それを中断して書かれた2つの短篇小説、即ち『判決』と『変身』の完成、短篇集『観察』の出版が相次ぎ、生産的であったことと同時に、インスピレーションに駆られ、1夜のうちに8時間で書き上げた『判決』の至福の創作体験が作家としての確証となったからでもある。それはまた、この作品において彼独自の形式を見出したことを意味している。

作品の中核にある父—子モチーフは、Vater の多義性にもとずいて神—キリスト、神—人間、神—カフカ、旧世代と新世代、カフカ父子として中心人物ゲオルク父子と重なり合っているが、そのことを通して作品は旧約聖書の原初の世界から現代、あるいはカフカまでを包括した時空間を表現しうる可能性を獲得しているのである。彼は、『判決』に関して S. フロイトの影響を認めているが、他のことも排除できないとしても、夢の方法、『夢判断』に示された夢の形成理論こそがそこで応用されたとみるべきだろう¹⁾。ゲオルク父子は市民社会の住人とは思われないが、それは夢の方法によって脈絡の異なる複数の父子関係が関係の類似、共通点を利用してそこに圧縮・還元され、同時的に表現された結果なのである。夢が「夢内容（顕在内容）」と、本来の願望としての「夢思想（潜在内容）」を持ち、その2層の衝突によって歪曲した表現となるように、『判決』は、それぞれの父子関係の交差によって因果関係、論理の一貫性の無視、人物の一貫した性格の欠如、異質な空間秩序等が生じ、われわれの現実とは異なる法則に支配された世界となっている。『判決』に対して提出されてきたさまざまな傾向の解釈—宗教・神話的、心理学的、社会学的、伝記的、そしてそれらのいくつかが組み合わされることもある解釈は、この創作原理にもとづく作品の多面性を示しているものであり、その原理を無視した個々の解釈は特定の1面あるいは2面を主たる関心にしたがって切り取ることになるのである。

1) 拙稿「F. カフカの『判決』—その構成と解釈」アルテス・リベラレス第27号 1980, s. 77-89 参照。

『判決』がまた F. バウアーに動機づけられていることにもふれなければならない。つい1ヶ月少し前に知り合い、2日前に交際の申込みの手紙を書いたばかりの彼女との結婚の可能性がもうすでにここで問題にされている。この作品を書くことによって、カフカは作家であることと自然な生活、即ち結婚して家庭を持つことが二者択一の問題として提示されていること、しかもその選択が拒みがたい一種の命令の如きものとしてせまられていることを知った。この作品は、それにもかかわらずカフカの生を求める、その後の長い戦いの開始ともなっている。それは、後にカフカ自身が先例を発見することになるが、彼と同じ婚約状況において、キルケゴールに生じた神秘的な体験に酷似している。だが彼等は、この苛酷な禁令に抵抗する、特にカフカは常に失敗に終るのだが、バウアーとの2回の婚約を含む3回の婚約によって生の獲得を繰り返し試みる。他方、作家としての資格の正当性、命令自身の確実さ、発令者の存在についての疑念と戦わなければならない。その後の作品には、引き裂かれた作家の内面がそのままテーマ、モチーフ、素材となって反映することになるだろう。『判決』はその意味でカフカの作家として新たな時期を画する作品である。

『変身』は、『判決』の約2ヶ月後に着手され、当初の計画とはちがって書き進めるうちに拡大し、結果的にカフカの完成した作品の中では最も大部のものになった。『判決』が背後の途方もない時間と諸問題を短時間、例えば10あるいは20分—のうちに父子の間に生じた事件に詩的に圧縮したのに対して、登場人数は数倍になり、数ヶ月にわたる物語の『変身』²⁾は出来事と、それに関わる人物が物語の時間にしがたって具体性をもって詳細に叙述されて小説的体裁をなしているようにみえる。しかし、ここでも『判決』と同様に、謎の多い不条理な世界に直面するのである。

『変身』について論ずる時、その中心人物グレーゴール・ザムザのセールスマンに起きた「毒虫」への変身について直接、間接は問わず言及せざるをえない以上、これまでの研究史はその不可解な謎をめぐる展開してきたとも言えるのである。グレーゴールが父の負債を背負い、セールスマンの不安定な地位や旅先の苦勞を嘆くのを知れば、そこに変身の意味を見出したくなるだろう。変身した彼の姿に資本主義社会における典型的疎外を表わす形象を読み取り、さらにその怪物がそこから出現した悪夢にもそれに相応した内容を容易に想像しうることによって、作品はプロットの一貫性が確保されるようにみえる。またそのような読みを作家は期待し、読者を誘導しているのである。だが作品には実際には変身の意味や原因、夢の内容が明確に説明されているわけではない。上記のような意味付与によって、グレーゴールの変身と密接な関わりを持つと思われる他の謎は解決されない。変身

2) W. H. Sokel: Franz Kafka—Tragik und Ironie, Zur Struktur seiner Kunst. (Albert Langen • Georg Müller) 1964, s. 97 参照。

した息子を見て母親がくりかえし気絶する理由、額縁に入れられた写真の女性の彼との関係、父が「野蛮人」に例えられる理由、それらもすべて同時に説明しうる答えが用意されなければならない。

『変身』のこれまでの解釈も『判決』の場合と同傾向の多様性を示している。³⁾ その上さらに変身・分身モチーフ、比較・影響関係の研究が加わり、ほとんど考えうる限りの方法で全ゆる方向から分析が行なわれてきた。それにもかかわらず十分な成果を得ていない理由は、カフカの作品の特異性に対する認識が不十分なために対象に不適切な方法によって接近したことにあると考えられる。ここでは作品形式に相応しい別な方法が模索される必要がある。

本稿は、『変身』も『判決』について確められた創作方法、即ち異次元の事柄を同一モチーフを軸にして重ね合わせて表現する夢の方法によって表現され、複数の層から成り立っているという仮定に立っている。⁴⁾ すでに見たように、『変身』は『判決』の後に短期間において小作品の予定で書かれ⁵⁾、したがって『判決』の創作法へのカフカの強い確信が持続されるだろうこと、両作品に共通する特性（因果関係、論理、人物の一貫性の無視、父子モチーフ、そしてフェリーツェ・バウアーとの関係など）が指摘しうるからである。それゆえここでも最も有効な方法と思われるフロイトの『夢判断』の解釈法によって、作品の隠された深層を明らかにし、「写真」の女性、グレゴールの変身の意味、機能、原因などについての解明を試みたいと思う。

2

『変身』の表層と深層との接点を中心人物の名 Gregor に求め、『グレゴorius』との照応を探ることにしよう。そのギリシア名グレゴoriusは「用心深い男」を意味し、グレゴールは実際にそうした習慣を商旅行から得たことを誇っている⁶⁾。次に、プロフットの構造——人生の頂点からの突然の落下——と、グレゴールが他の人々の前に出現する際の印象深い場面から『オイディプス王』と、最後にリンゴの象徴や聖書へのほのめかしから『聖書（旧約聖書）』との対応を検討する。⁷⁾

3) これまでの『変身』の研究の概観は、Peter U. Beicken: Franz Kafka, Eine kritische Einführung in die Forschung. (Athenäum Fischer Taschenbuch) 1974 と、同著者による Franz Kafka, Die Verwandlung. (Philipp Reclam Jun.) 1983 によって可能である。

4) 後藤明生：『カフカの迷宮』（岩波書店）1987の主張は、本稿の仮定と一致する。

5) Franz Kafka: Briefe an Felice. (S. Fischer) 1970, s. 102 参照。

6) Franz Kafka: Sämtliche Erzählungen. Hrsg. von Paul Raabe (Fischer) 1973, s. 67. 以下本書からの引用は、略号 V. とする。

7) 対応の検討は、『変身』第1部に限定する。

2-1 『グレゴorius』⁸⁾との対応

panzer (-artig); *bogen* (-förmigen) (V. 64)/---; ich (Gregorius) selber bin *aufs beste gerüstet*. (G. 1725) 武装した騎士

Bettdecke (V. 64)/ Nun ließ er (der Abt) ihm (Gregorius) aus der Seide, die er bei ihm einst gefunden hatte, *Kleidung* schneiden; ---. (G. 1641-4) 鎧の上に着る肩かけ。

Reisender (V. 64)/ Obgleich nun Gregorius *Ritter* war, --- (G. 1649) 聖戦に赴く者——騎士。

ein *richtiges*, nur etwas zu *kleines Menschenzimmer* (V. 64)/ ein festgefügtes *Kästchen* ---. Darein wurde --- das schöne Kind (Gregorius) gelegt, --- (G. 705-9) 特別な小部屋——箱。

--- *schaukelte* er (Gregor) ---. Er versuchte es wohl *hundertmal*, ---. (V. 64)/ Aber ein *Unwetter* trief sie (die Fischer) dort, es erhob sich ein tosender Sturm, --- (G. 948-9); ---, sahen sie *auf den gefährlichen Wogen die Barke des Kindes* (des Gregorius) treiben. (G. 954-5) 荒波の海の漂流の様子。

---, wie einfach alles wäre, wenn man *ihm zu Hilfe käme*. *Zwei starke Leute* -- hätten vollständig genügt; (V. 69)/ Da ließ er (der Abt) *ihn* (den Schrein) *auf den Sand heben* ---. (G. 1029) 抱え上げる2人の力の強い人たち。G.では漁師である。

Nun, ganz abgesehen davon, daß *die Türen versperrt waren*, hätte er wirklich *um Hilfe rufen sollen?* Trotz aller Not konnte er bei diesem Gedanken *ein Lächeln* nicht unterdrücken. (V. 69)/ ---, *als das Kind* (Gregorius) *laut zu weinen begann und damit dem Freunde Gottes Anwesenheit kundtat*. (G. 1017-9); Das fremde Waisenkind, ---, *lächelte* den Abt --- *an*. (G. 1035-9) 箱の中のグレゴoriusは泣き声を上げて助けられ、僧院長にはほえみかける。

Schon war er (Gregor) so weit, daß *er bei stärkerem Schaukeln kaum das Gleichgewicht noch erhielt*, --- (V. 69)/ *Das Sturmgetöse wurde so heftig*, daß ihnen auf dem Meere unheimlich zu werden begann. (G. 965-7) 荒海上の危険な状態。

Waren denn alle Angestellten samt und sonders Lumpen, *gab es denn unter ihnen keinen treuen ergebenen Menschen*, ---? (V. 69)/ Immer wenn die Bürger an den Gegner garieten — mochten sie auch den kürzeren ziehen —, *ließ er (Gregorius) es sich selten entgehen, irgend etwas zu unternehmen*, --- (G. 1978-82) 献身的な両者。

Da hat er (Gergor) --- *einen kleinen Rahmen geschnitzt*; ---, wie *hübsch* er ist; er hängt

8) H. von Aue: Gregorius, der gute Sünder. Mhd. Text nach der Ausgabe von Fr. Neumann. Übertragung von B. Kippenberg. (Philipp Reclam Jun.) 1986. 本書の引用はG.と略し、数字は詩行を示す。なお、カフカは学生時代に von Aue についての講義に出席した。Klaus Wagenbach: Franz Kafka, Eine Biographie seiner Jugend. (Francke) 1958, s. 243 参照。

drin im Zimmer; --- (V. 70); ---, hing das Bild, das er (Gregor) --- in einem ---, vergoldeten Rahmen untergebracht hatte. (V. 64)/ --- eine Tafel aus edlem Elfenbein, ---, mit Gold und Edelstein reich geziert: --- (G. 720-3); ---, verbarg er (Gregorius) jenen Gegenstand (die Tafel), ---, geschwind in einer Öffnung hoch in der Mauer. (G. 2457-9) 額縁と象牙板の共通点——装飾と部屋の中の位置。

--- begann die Schwester zu schluchzen. --- und (Gregor) dachte nicht im geringsten daran, seine Familie zu verlassen. (V. 71)/ Sie (des Gregorius Eltern) tauschten in Treue ihre Herzen, als sie sich trennen mußten---. Es mußte sein, der Abschied schmerzte. (G. 651-5) 別離に際し涙にくれる兄妹。

Wegen dieser kleinen Unhöflichkeit, --- konnte Gregor doch nicht gut sofort weggeschickt werden, Gregor schien es, daß es viel vernünftiger wäre, ihn jetzt in Ruhe zu lassen, statt ihm mit Weinen und Zureden zu stören. Aber es war eben die Ungewißheit, welche die anderen bedrängte und ihr Benehmen entschuldigte. (V. 71)/ Da geschah ohne seine Absicht etwas Sonderbares: Er (Gregorius) tat, --- dem Kinde des Fischers so weh, daß es zu weinen begann ---. (G. 1289-93); Handle nicht überstürzt in deinem jugendlichen Zorn, damit es dich nicht später gereut. (G. 1454-6) 無作法, 追い出し, 泣き, などだめ。実情がよく分らなくて気をもむ家族と僧院長。

Wie das nur einen Menschen so überfallen kann! Noch gestern abend war mir ganz gut, ---, schon gestern Abend hatte ich eine kleine Vorahnung. Man hätte es mir ansehen müssen. Warum habe ich es nur im Geschäfte nicht gemeldet! (V. 72)/ ---, denn sie (die Herrin) diese (Kleidung) näher besah, sprach sie zu sich selbst, das sei doch jener Seidenstoff, den sie --- ihrem Kinde eingepackt hatte; --- (G. 1943-7); Herr, Ihr (Gregorius) müßt mir jetzt zu erkennen geben, woher Ihr stammt; es wäre --- schon früher für diese Frage Zeit gewesen: Ich fürchte, ich komme mit ihr zu spät! (G. 2570-4) 予感あるいは気になること。怠った告知と遅すぎた質問。

Gregor, Grete (V. 73)/ zwei Kinder ---: einen Sohn und ein Töchterlein, --- (G. 181-4) 双生児を意味する類音⁹⁾

Er (Gregorius) fühlte sich wieder einbezogen in den menschlichen Kreis und erhofft von beiden, vom Arzt und vom Schlosser, ohne sie eigentlich genau zu scheiden, großartige und überraschende Leistungen. (V. 73)/ Und als sie (die Boten) ihn (Gregorius) bekleidet hatten, führten sie ihn von dem einsamen Felsen fort, den sündelosen Mann. (G. 3656-9); Dort verband sie (die Gnade des Gottes) ihm (Gregorius) seine tödlichen Wunden, ---. (G. 139-40); ---, bis gestern meine (des Fischers) sündigen Hände den Schlüssel in einem Fische fanden. (G. 3649-50) 人間界への復帰。医者, そして足枷の鍵を返し与える者としての神。

---; mit ihrer (der Kiefer) Hilfe brauchte er (Gregor) --- den Schlüssel in Bewegung und

9) 同様な見解については, Carsten Schlingmann: Die Verwandlung. In „Interpretationen zu Franz Kafka“ (R. Oldenbourg) 1968, s. 98 及び Heinz Politzer: Franz Kafka, der Künstler. (S. Fischer) 1965, s. 112 参照。

achtete nicht darauf, daß er sich zweifellos irgendeinen Schaden zufügte, denn *eine braune Flüssigkeit kam ihm aus dem Mund*, floß über den Schlüssel und tropfte auf den Boden. (V. 74)/ *Die Fesseln, ---, hatten über den Füßen das Fleisch bis auf den Knochen grausam durchgescheuert, so daß aus frischen Wunden beständig das Blut herabfloß.* (G. 3449-55) 鍵で傷つき液(血)のしたたる口と、足枷のはまる流血の脚。

Wie hatte sich die Schwester denn so schnell angezogen? (V. 73); --- es war fast noch Nacht, --- öffnete die Schwester, *völlig angezogen*, die Tür ---. (V. 81)/ *Sie* (die Schwester) blickte den Bruder an und *sprach: Zeige dich als ein Mann! Weine nicht wie ein Weib, das kann uns beiden nicht helfen* ---. (G. 465-8) 一家の危急の際に別人のように毅然とする妹たち。

„Sie (der Prokurist) haben einen besseren Überblick, als *der Chef selbst, der in seiner Eigenschaft als Unternehmer sich in seinem Urteil leicht zu Ungunsten eines Angestellten beirren läßt*. Sie wissen ---, daß der Reisende, der fast das ganze Jahr außerhalb des Geschäfts ist, so leicht *ein Opfer von Klatschereien, Zufälligkeiten und grundlosen Beschwerden* werden kann, ---.“ (V. 76)/, --- und was sollte dich (Gregorius) schon *das Geschwätz* einer Törlin beirren? --- (G. 1474-5); Da *geschah ohne seine* (des Gregorius) *Absicht etwas Sonderbare*: ---. (G. 1289); *Sie* (des Gregorius Pflegemutter) *rief*: --- *Dieser eingebilddete Dummkopf! Habe ich ihn (Gregorius) jetzt dafür erzogen, daß er mir meine Kinder verprügelt*, vor den Augen ihrer Familie? --- (G. 1306-10) 社員や養子に対して偏見から判断を誤まる企業家と養母。陰口, 偶然, 言いがかりの犠牲者。

---, da er (der Reisende) von ihnen (Klatschereien usw.) meistens gar nichts erfährt und nur dann, wenn er erschöpft eine Reise beendet hat, *zu Hause die schlimmen, auf ihre Ursachen hin nicht mehr zu durchschauenden Folgen am eigenen Leibe zu spüren bekommt*. (V. 76)/, --- ich (Gregorius) begehrte in meinem Herzen ein Wiedersehen in Liebe und Güte ---: *Ich wäre ihr (der Mutter) besser fern geblieben, als solcherart ihr nahe zu kommen*. (G. 2617-22); In seinem Herzen wünschte er (Gregorius), *es möge ihn der gnädige Gott in eine Wüste senden, in der er dann büßen würde bis an seinen Tod*. (G. 2755-9) 故郷で知る, 忘れ去られた事実に起因する事件の最悪の結果, そして贖罪。

2-2 『オイディプス王』¹⁰⁾との対応

Es ist eine sonderbare Art, *sich auf das Pult zu setzen und von der Höhe herab mit dem Angestellten zu reden*, der überdies wegen der *Schwerhörigkeit des Chefs* ganz nahe herantreten muß. (V. 65)/ *Selige Stimme des Zeus! Aus Delphis goldenen Kammern drangst du in unsere Mauern*: ---. (O.10); *Ohne Antwort* ließ Apoll mich ziehen, aber *anders schweres Leid, furchtbarstes Leid, verkündete sein Spruch*: ---. (O. 37) オリン波斯山, デルポイの神殿に座すゼウス。質問に答えずに以外な神託を出すことを「難聴」にかけた。

---, *ein Donnerwetter des Chefs* --- (V. 66)/ *Herrscher der feurigen Blitze, Vater Zeus*, ---!

10) Sophokles: König Oidipus. Übersetzung und Nachwort von E. Buschor. (Philipp Reclam Jun.) 1987. 本書の引用は O. と略し, 数字は詩行数不明のためページ数を示す。なお, 引用の都合上行頭の大文字を小文字にしたところもある。

(O. 12) 雷神ゼウス。

„*Sie* (das Dienstmädchen und Gregors Eltern) *öffnen nicht*,“ sagte sich Gregor, befangen in *irgendeiner unsinnigen Hoffnung*. (V. (69)/---, (die Königin) warf hinter sich die Tür in das Schloß--- (O. 59);--- *stürzt er (Oidipus) zur Tür, drückt das Riegelholz aus seinen Pfosten, stürmt in das Gemach*. (O. 59) 「開けなく」とも扉の門を壊して入るので「無意味」。オイディプスを意識した表現。

Gregor suchte sich vorzustellen, *ob nicht auch einmal dem Prokuristen etwas Ähnliches passieren könnte, wie heute ihm; die Möglichkeit dessen mußte man doch eigentlich zugeben*. (V. 70)/ *Im Traum vielleicht—da sah sich mancher schon im Bett der Mutter!* (O. 44) 夢の中の母親との同衾——オイディプス夢のように、よくある出来事。

„---; er (Gregor) ist so *hartnäckig*; ---.“ (V. 70); „Nun aber sehe ich (der Prokurist) hier Ihren (des Gregors) unbegreiflichen *Starrsinn* ---.“ (V. 72); „---, ich (Gregor) bin nicht *starrköpfig* ---.“ (V. 75)/ --- und deinen eignen *Starrsinn* siehst du (Oidipus) nicht! (O. 17) グレゴールの頑固さは、オイディプス譲り。

Warum weinte sie (die Schwester) denn? --- Noch war Gregor hier und dachte nicht im geringsten daran, *seine Familie zu verlassen*. (V. 71)/ Was hör ich (Oidipus)? *Ist dies nicht der beiden (der Töchter) Klagelaut?* (O. 66) 出発に際して泣く妹たち。オイディプスにとって娘は妹でもある。

„---. *Ich* (der Prokurist) *hatte ursprünglich die Absicht, Ihnen (Gregor) das alles unter vier Augen zu sagen, ---, weiß ich nicht, warum es nicht auch Ihre Herren Eltern erfahren sollen.*“ (V. 72)/ *Vernimm: Der Mörder jenes Laïos, der Mann, den du (Oidipus) bedrohst und laut verfluchst und greifen willst, er weilt in dieser Stadt.* (O. 22) 秘密の暴露。

---; er (Gregor) war begierig zu erfahren, was die anderen,---, bei seinem Anblick sagen würden. *Würden sie erschrocken, dann hatte Gregor keine Verantwortung mehr und konnte ruhig sein.* (V. 72)/ --- und (Gregor) *war sich dessen wohl bewußt, daß er der einzige war, der die Ruhe bewahrt hatte,---*. (V. 75)/ *O welcher Gott hat dich (Oidipus) vermocht, zu löschen deiner Augen Licht?* --- *Apollon wars, Apollon tats!* Gräßliches, gräßliches ließ er mich leiden. *Doch nicht er schlug zu, meine Hand schlug zu.* (O. 61) オイディプスが目から流血しながらコーラスの前に現われる場面との平行。彼の運命の責任者はアポロである。目をつぶす瞬間にも自由、つまり冷静さを彼は保持している¹¹⁾。

---, (Gregor) warf sich gegen die Tür, hielt sich an ihr aufrecht---. (V. 74); ---; (Gregor) *hielt sich jetzt nur noch mit dem Munde aufrecht, ---.* (V. 74); (Gregor) *fiel aber sofort, ---, --- auf seine vielen Beinchen nieder.* (V. 77)/ Als jene Hündin ihre *Rätsel* sang, --- (O. 19) スフィンクスの謎「4本, 2本, 3本」を身振り化している。

--- und (Gregor) achtete nicht darauf, daß er sich zweifellos irgendeinen Schaden

11) ヴェルナン／吉田敦彦：『プロメテウスとオイディプス』(みすず書房) 1978, p. 124 参照。

zufügte, denn *eine braune Flüssigkeit kam ihm aus dem Mund*, floß über den Schlüssel und tropfte auf den Boden. (V. 74)/ --- und (Oidipus) hob sie (zwei goldene Nadeln) hoch und stieß sie in *der Augen weiten Kreis* ---; --- traf er immerzu die aufgerißnen Bälle, *deren Blut ihm auf die Wangen* ---. (O. 59) 血は褐色の液に、目は口へ移動されている。

---, da hörte er (Gregor) schon den Prokuristen ein lautes "Oh!" ausstoßen --- *es klang, wie wenn der Wind saust* --- und nun sah er ihn auch, wie er, der *der Nächste* an der Tür war, die Hand gegen den offenen Mund drückte ---. (V. 74)/ O unseliger Mann, O weh, O weh! (O. 60) 間投詞「weh」を「wehen」の命令形に解すことから、「der Wind saust」の表現が生れる。O. の引用はコーラスの言葉であり、代理人はそれを模倣している。

Die Mutter --- mit vor der Nacht her noch *aufgelösten, hoch sich sträubenden Haaren*⁽¹⁾ --- *sah zuerst* mit gefalteten Händen *den Vater an*⁽²⁾, *ging* dann zwei Schritte zu Gregor *hin*⁽³⁾ und *fiel inmitten ihrer rings um sie herum sich ausbreitenden Röcke nieder*⁽⁴⁾, *das Gesicht ganz unauffindbar zu ihrer Brust gesenkt*⁽⁵⁾. (V. 75); *sprang diese* (die Mutter), ---, *mit einemale in die Höhe*⁽⁶⁾, ---, hielt den Kopf geneigt, ---, lief aber, ---, sinnlos zurück; ---; *setzte sich*, ---, *eilig auf ihn (den Tisch)*⁽⁷⁾; "Mutter, Mutter," *sagte Gregor*⁽⁸⁾ *leise*, ---. (V. 77); Darüber schrie die Mutter neuerdings auf, flüchtete vom Tisch und *fiel dem ihr entgegeneilenden Vater in die Arme*⁽⁹⁾. (V. 78)/ In wildem Jammer stürzte sie (die Königin) herein ---, *die Locken von der Nägeln ganz zersaust*^(1'), --- und rief *zum längst verstorbenen Laios*^(2'), --- und wie er sie *dem Sohne*^(3') hinterließ als greuelvoller Brut Gebärerin, *auf einem Lager*^(4'), ---. (O. 58f.); --- und (Oidipus) rief: „*Wo ist die Gattin*^(5') --- nicht die Gattin, nein, *der Schoß*, der meine Kinder und mich selbst gebar?“ --- Da fanden wir (Diener) *die aufgeknüpfte Frau*^{(5')(6')} in ihren Schlingen schwebend. Wie er sie erblickt, da schreit er gräßlich auf und *löst den Strick*⁽⁹⁾, *und wie sie dann am Boden lag*^(4'), ---. (O. 59) 逆立った髪 (1), (1')。夫への視線と呼びかけ (2), (2')。息子への関心と言及(3), (3')。くずおれ, 横たわる母 (4), (4')。縊首 (5), (5')。縊首の先行跳躍 (6), (6')。寝台とテーブルに腰をおろす (7), (7')。母への呼びかけ (8), (8')。腕の中に抱き取られる (9), (9')。

Der Vater ballte mit feindlichem Ausdruck die Faust, als wolle er Gregor in sein Zimmer stoßen, *sah sich dann unsicher im Wohnzimmer um*, beschattete dann mit den Händen die Augen und *weinte*, ---. (V. 75)/ Schon öffnet sich das Tor des Hauses und *ein Schauspiel* tut sich auf, *das auch den schlimmsten Feind erbarmen muß*. (O. 60) 父はグレゴールの姿に敵意にかられるが、オイディプスの姿は「最悪の敵にさえ憐れみの心を起させずにはいない」ことを思い出し、父親として恥じ、周囲をうかがい、泣くふりをするうちに本当に泣けてきた。グレゴールの父に対する強烈な皮肉。

---; klar stand --- ein Abschnitt des --- *endlosen, grauschwarzen Hauses* --- es war ein *Krankenhaus* ---. (V. 75)/ Du (Oidipus) weißt es selber, wie *die Stadt* erlebt und *aus dem Wogensturz der Todesnot ihr Haupt nicht mehr zum Licht erheben kann*. *Sie stirbt dahin mit ihrer jungen Saat, mit ihren Vieh, mit jedem Frauenschuß*, ---. (O. 5) 途方もない大病院——疫病の蔓延するテバイ。

--- „ich (Gregor) werde --- *wegfahren. Wollt ihr, wollt ihr mich wegfahren lassen?* ---; das Reisen ist beschwerlich, aber *ich könnte ohne das Reisen nicht leben.*“ (V. 75)/ *O führt mich (Oidipus) hinweg, führt mich schnell hinweg,* ---. (O. 62) くりかえされる旅立ちの要求。オイディプスは故郷のテバイを出、キタイロン、コリントスを経てテバイに戻り、キタイロンに没する、彼の一生は旅にあった。

Andererseits habe ich (Gregor) die Sorge um meine Eltern und die Schwester. Ich bin in der Klemme, ---. Machen Sie (der Prokurist) es mir nicht schwieriger, als es schon ist. (V. 76)/ *Doch für die armen Mädchen,* ---, mit denen ich das Meine treu geteilt, *sei stets besorgt!* (O. 66) 会社と家族、運命と娘(妹たち)の板ばさみ。

---, daß der Reisende, der fast das ganze Jahr außerhalb des Geschäfts ist, so leicht *ein Opfer von Klatschereien, Zufälligkeiten und grundlosen Beschwerden* werden kann, ---, da er ---, *zu Hause die schlimmen, auf ihre Ursachen hin nicht mehr zu durchschauenden Folgen am eigenen Leiben zu spüren bekommt.* (V. 76)/ Dort galt ich (Oidipus) als der erste Bürger, bis *ein Ding mich traf,* ---. *Beim Mahle rief ein schwerbezeichter Mann, ich sei nicht meines Vaters echter Sohn.* (O. 37) 酒席における酔漢の口から出た以外な抗議。オイディプスだけが知らない世間の噂。母との結婚と自己処罰。

---, und jeden Augenblick *drohte ihm (Gregor) doch von dem Stock in des Vaters Hand der tödliche Schlag auf den Rücken oder auf den Kopf.* (V. 78)/ --- und er (Laïos) lauerte, bis ich (Oidipus) am Wagen dicht vorüberkam, da *fuhr sein Pferdastachel auf mein Haupt.* (O. 37) 襲いかかる父の杖の攻撃。

2-3 『聖書』¹²⁾との対応

--- und *das trübe Wetter* — man hörte *Regentropfen* auf das Fensterblech aufschlagen — machte ihn ganz *melancholisch.* (V. 64)/ Und die Erde war *wüst und leer,* und es war *finster* auf der Tiefe; und der Geist Gottes schwebte auf *dem Wasser,* (T. 1. 2) 闇と水の世界と、それに対する印象。

Vom *Pult* hätte er (der Chef) fallen müssen! Es ist auch eine sonderbare Art, *sich auf das Pult zu setzen* ---. (V. 65)/ *Gott* (T. 1. 2) 聖書台に座す聖書=神の言葉=神。

Es war *eine Kreatur* des Chefs, *ohne Rückgrat* und Verstand. (V. 66)/ *Tiere* (T. 1.24-25) 被造物、特に無脊椎動物。

--- und (der Prokurist) ließ seine *Lackstiefel* knarren. (V. 70)/ Das Weib sprach: Die Schlange *betrog* mich also, daß ich aß. (T. 3. 13) 欺き。

Warum *ging* denn die *Schwester* nicht zu den anderen? Sie war wohl erst jetzt aus dem Bett aufgestanden und hatte noch gar nicht angefangen *sich anzuziehen.* (V: 71)/

12) Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments. Nach der deutschen Übersetzung M. Luthers (Württembergische Bibelanstalt) 1963, 本書からの引用は T. と略し、数字は章節を示す。

Darum *wird ein Mann Vater und Mutter verlassen* und an seinem Weibe hängen, ---. Und sie waren beide nackt, ---. (T. 2. 24-25); Und *Gott der Herr* machte Adam und seinem Weibe Röcke von Fellen, und *kleidete sie*. (T. 3. 21) 両親からの独立。着衣。

Gregor, Grete (V. 73)/ 'ish, 'ishshāh¹³⁾ (T. 2. 23) 類音が「男」、「女」を表わす。

--- -- es klang, wie wenn *der Wind saust* --- und nun sah er (Gregor) ihn (den Prokuristen) auch, wie er, ---, *die Hand gegen den offenen Mund drückte* und langsam *zurückwich, als vertreibe ihn eine unsichtbare*, gleichmäßig fortwirkende *Kraft*. (V. 74f.)/ Da *vernahmen sie* (Adam und Eva) *den Schritt Jahwes Gottes*, der sich beim *Tagwind* im Garten erging, und der Mensch und sein Weib *verbargen sich* vor Jahwe Gott unter den Bäumen des Gartens. (T. 3. 8)¹⁴⁾ 風が吹き出し涼しくなる午後, 神の足音に禁令に反した罪の意識から身を隠すアダムとエヴァを下敷にしている。

---, sondern (der Prokurist) verzog sich, ---, gegen die Tür, aber ganz allmählich, als bestehe *ein geheimes Verbot*, das Zimmer zu verlassen. (V. 76)/ Und Gott der Herr *gebote* dem Menschen und sprach: ---; aber von dem Baum der Erkenntnis des Guten und Bösen *sollst du nicht essen*; ---. (T. 2. 16-17); Da *wies* ihn (Adam) Gott der Herr aus dem Garten Eden, ---. (T. 3. 23) コンテキストからは「geheimes」は不要にみえる。ここでは認識の木の実を食べることの「Verbot」に, 罪に対する樂園からの追放命令「Gebot」をかけた洒落であり, この罰が事前に明らかにされていなかったことから「geheimes」がつけられている。

---, und nach *der plötzlichen Bewegung*, mit der er (der Prokurist) zum letztenmal den Fuß aus dem Wohnzimmer zog, hätte man glauben können, er habe *sich soeben die Sohle verbrannt*. (V. 76)/ ---, und du (die Schlange) wirst ihn (des Weibs Samen) *in die Ferse stechen*. (T. 3. 15) 「踵 (Ferse)」が「足裏 (Sohle)」に移動され, 「stechen」は痛みを表わす類義的な「sich verbrennen」で言い換えられている。代理人は蛇に噛まれた際の反射的行動を表わす。

Und gewiß hätte der Prokurist, dieser *Damenfreund*, sich von ihr (der Schwester) lenken lassen; ---. (V. 77)/ Das Weib sprach: *Die Schlange betrog mich* also, daß ich aß. (T. 3. 13) 「婦人の友 (Damenfreund)」は, エヴァを誘惑して禁断の実を食べさせた蛇を表わすカフカの造語。しかしここでは女性に説得されそうになった。

2-4

『変身』の深層にはその他に, 表層とは異なる戦闘をライトモチーフとする一連の物語がある。このサブプロットは, 作品の表面の善良で, 家族のために犠牲になるようにみえるグレゴールの物語を修正する機能を持ち, この関連において彼の軍隊時代の写真は単

13) ヘブライ語の音写記号。『聖書語句大辞典』(教文館) 昭和52年による。

14) 本引用のみ Die Bibel, die Heilige Schrift des Alten und Neuen Bundes (Herder) 1978 による。

なる想い出でとしてではなく、兵士としての第2の意味をおびてくるのである。『判決』のゲオルクと同様に、グレゴールも表裏のある二重性格として構想されている。

この作品には、表面のコンテキストと一見遊離した不適格な直喩、語句、人物の行為や軍用語等が見うけられる。そのあるものにはすでに上記の深層の対応の際にふれているが、それさえ新たなコンテキストにおいて今一度別な意味を担うだろう。それらを文字通り一義的に受け取り、つなぎ合わせることによって『変身』には例えば次のような語りが生まれてくる。

鎧兜に弓 (V. 64) を携えたグレゴールは十字軍の騎士として聖地附近に出征している。「ハーレムの女たちのように」(V. 65) 昼頃に「ようやく朝食を取っている」(V. 65) 騎士たちとはちがって、彼は勤勉で野心家なのだ。騎士団の指揮者 (Chef) とは「ずっと前に関係を断っているところだった (ich hätte längst gekündigt.)」(V. 65) のだが、「反乱をはやまるのは馬鹿げている (Dies frühzeitige Aufstehen --- macht einen ganz blödsinnig)」(V. 65) ので自重している。指揮者は、「その時になれば大きな傷手を負う」し、彼は「大金が手に入る (Dann wird der große Schnitt gemacht)¹⁵⁾」(V. 65) だろう。

指揮者は、グレゴールが第「5次」(, --- mein Zug fährt um fünf) (V. 65)、第「7次」(Der nächste Zug ging um sieben Uhr) (V. 65) の「遠征」に合流しなかったのを知って、彼が税の「取立金 (Inkasso)」(V. 71) を着服し、略奪した「異教徒の大金 (Heidengeld)¹⁶⁾」(V. 76) を手にして、今は危険な戦闘に出かけないのだと思っている。支配人が使者として来ると、グレゴールは「バリケードを築き (verbarrikadieren)」(V. 71)、「軍事パレードをしている (paradiieren.)」(V. 71) 彼は今「膠着した前線を突破しようとしている (hart die Front durchbrechend)」(V. 75) ところなのだ。「大きくて1つ1つが目に見える、文字通りバラバラと地面に雨霰と降ってくる射撃の礫 (mit großen, einzeln sichtbaren und förmlich auch einzelnweise auf die Erde hinuntergeworfenen Tropfen)」(V. 75) で多数の死傷者が出ているのは、「とてつもなく大きい (endlos) --- 病院 (Krakenhaus)」(V. 75) からわかる。使者の到着を知ったグレゴールはバリケードの門を開け、敬意を表して部下を率いて出迎えると、使者は感ちがいで「ゆっくり後ずさりした。まるで打ち揃って前進してくる軍勢が彼を追いかけようとしているみたいだった (--- und langsam zurückwich, als vertreibe ihn eine ---, gleichmäßig fortwirkende Kraft.)」(V. 75) 「代理人 (使者) を何んとしても味方にしなければ」(V. 77) と思い、追いかける。「代理人が足底を火傷したように思える」(V. 76) 程の酷暑の中、グレゴールは乾いた喉を「コーヒー」(V. 78) でうるおしながら追い続けるうちに、敵の支配地域に入っていた。「父 (敵) は右手に杖 (槍) を取り、左手に新聞紙 (楯) を持ち、足踏みして威嚇しながらグレゴールを押し戻そうとした。」(V. 78) それは「シッ、シッという音にしか聞えない言葉の野蛮人だった。(--- und (der Vater) stieß Zischlaute aus, wie ein Wilder.)」(V. 78) 敵の大軍 (---; es klang --- gar nicht mehr die Stimme bloß eines einzigen Vaters; ---) (V. 79) の前に敗れ、敵将が「指揮する (---, sondern (der Vater) dirigierte --- mit der Spitze seines Stocks.)」(V. 79) ままに降伏する。その後の彼は第2部で「捕虜」(V. 85) となり、第3部では「老いた傷病兵」(V. 97) となって異郷で死んで行くのである。

15) 「Schnitt」は「もうけ」、「切り傷」の二重の意味になる。

16) 「大金」と「異教徒の金」の二重の意味に解される。

3

『変身』の明らかにされた深層をもとに、ここでは「最近グレゴールが絵入り雑誌から切り取った写真」¹⁷⁾の女性について検討してみよう。

『グレゴリウス』との対比からすでに明らかなように、彼の所持した象牙板とグレゴールの作った額縁との間には、その見事な装飾性と部屋の中の位置という共通点がある。第3にはさらに所有者にとっての絶大な価値があげられる。前者にとっては象牙板は教皇の地位より重要なものであり¹⁸⁾、後者は身を挺して額縁を守る¹⁹⁾。以上のことから額縁は象牙板の代替物としての意味が与えられていると言えるだろう。

さて象牙板の文書は、写真の女性と同様に匿名であったが、グレゴリウスはそこから自分の「高貴の生まれ」²⁰⁾を知る。彼が象牙板と文書を通して想像するまだ見ぬ母の姿は、したがってその身分に相応したものになるはずである。彼女に対比される「写真」の女性の「毛皮の帽子と毛皮の襟巻」²¹⁾についてしばしば性的意味を指摘されてきたが、それは後にみるように否定できないとしても、ここでは先ず「正座」の持つ意味をも考慮して地位の象徴が読み取られるべきである²²⁾。グレゴールの額縁によって飾られる女性は、グレゴリウスの想像上の母をモデルに現代的に造形化されていることになるだろう。「肘がすっかり隠れるどっしりとした毛皮のマフを見る人の方へ突き出している」²³⁾のは、手を差し出すことによって歓迎を、マフをつけたままによって拒否を同時に表わすあいまいな動作²⁴⁾に理解され、それはグレゴリウスに対する母の態度、つまり勇者として受け入れ、夫としては拒否する態度に一致する。ここでさらに、テバイの女王であったオイディプスの母にも同様な事態が生じたことを想起する必要がある。写真の女性はしたがって二重のモデルを持っていることになるのである。

母は、女性の絵の「ガラスに身を押しつけていた」²⁵⁾グレゴールを見て気絶するが、変身した息子の姿を以前に見ていることからすると、その行為に驚いたとみるべきだろう²⁶⁾。われわれは、『グレゴリウス』と『オイディプス王』においても我が子と同衾して自分気づく母達を知っている。そしてグレゴールの母の気絶に書き添えられる「一切のこ

17) V. 64.

18) G. 3721-5.

19) V. 93.

20) G. 734.

21) V. 64.

22) G. ドゥルーズ／ガタリ（宇波／岩田訳）：『カフカ——マイナー文学のために』（法政大学出版局）1978, p. 24 参照。

23) V. 64.

24) Carsten Schlingmann前掲書 s. 98 参照。

25) V. 93.

26) Wiebrecht Ries: Franz Kafka (Arthemis) 1978, s. 55 参照。

とをあきらめるかのように」²⁷⁾には、自らの罪の大きさに神の救いさえ断念するグレゴールiusの母と、縊首するオイディプスの母を念頭においた表現をみるのである。写真の女性が現実の母の姿とかけ離れているのは、深層のモデルによる影響と共に、オイディプスコンプレックスによって理想化されているからであり、また女性の両義的身振りには夢の中でグレゴールの欲望を満たしてくれる母と、現実の母が反映している。

4

『変身』の世界は夢が現実の中に入りこみ、渾然一体となっているところにその不思議な魅力と不気味さがあり、それがまたグレゴールの変身の説明を困難にするのである。

絵にはりつくグレゴールはオイディプスコンプレックスの形象化に他ならず、それはまた彼の変身が生じたあの夢の内容の再現とみることができよう。別の箇所で一見無関係におかれた文では、次のように言われている。「グレゴールは、新しい生活の最初の日から父が彼に対して、できるだけ厳しくすることがよいのだと思っていることをよく知っていた。」²⁸⁾このことは息子の変身について彼だけの見解を示しているとは考えがたいので、変身の原因が物語において問われない理由ともなるだろう。

グレゴールの「不安な (unruhig) 夢」²⁹⁾にもすでに性的意味がこめられているのである。この言葉はもう一箇所でも用いられていて、作品冒頭の一種の注釈となっている。妹は、「彼がいかに人を驚かすようにじっともたれかかって窓から外を眺めている」³⁰⁾のを見て、部屋に入らずに引き帰す。ようやく昼頃になって戻ってきた時、「彼女はいつもよりずっと落ち着きがなかった (viel unruhiger als sonst)」³¹⁾と言われている。すでに変身から一ヶ月経ち、妹が兄の姿に驚く理由がなかったとすれば³²⁾、それは妹が昆虫になった兄の性生殖器を見たことにあるだろう。その直前には椅子を用いて窓辺に身を寄せかけるグレゴールの様子が伏線として描かれるが、その姿勢は尾部を目立たせることになる。その直後には、「彼女が彼の身体の小さな部分を見て逃げ出さないために、ずいぶん自分を抑えているにちがいない」³³⁾とある。そこは「最も敏感な部分」³⁴⁾で、ベッドの柱にぶつけて「はげしい痛み」を感じる部分である。彼の夢はこのようにして再度性的な夢であること

27) V. 93.

28) V. 95.

29) V. 64.

30) V. 88.

31) V. 88.

32) V. 88.

33) V. 88.

34) V. 67.

が確認しうるのである。

彼の夢、母子相姦の夢は『グレゴorius』と、オイディプスコンプレックスの概念がそこに由来する『オイディプス王』に関連づけられて、グレゴールはその主人公達がその大罪に対して自ら下した罰を模倣している。グレゴoriusが海上の孤島に17年間贖罪を続け、オイディプスがキタイロンの山中に身を隠すのは、彼等が自分をもはや人間社会に属さない、人間以下の存在と考えるからである。妻の夫にしてその子供、自分の子供たちの父にして同時に兄弟という存在は獣であり³⁵⁾、グレゴールもそのようなものと形象化されるのである。妹は彼を実際に「Untier (野獣, 怪物)」³⁶⁾と呼んでいる。

グレゴールは作品の冒頭で「毒虫」と言われている。「Ungeziefer」とは有害小動物の類概念であり、変身した姿についての情報からすれば、恐らく南京虫、蚤、シラミ、ゴキブリ等になるだろう。しかし形態、行動性、色彩から判断すれば、いずれでもなく、むしろカブト虫やコガネ虫に似ているように思われる³⁷⁾。「毒虫」は一度だけしか使用されず、有害な行動もしないので、比喩的な意味で言われているにすぎない。

カフカは『父への手紙』で父子間の戦いを述べながら、戦い方について父の口を借りて「単独で向い合う者同士が力を競う騎士の戦い」と、「刺すばかりでなく、自分が生きていくためにすぐに相手の血を吸う毒虫の戦い」³⁸⁾があるとと言う。これは直接『変身』について言及されているわけではないが、この作品に父—子モチーフがある以上無視出来ないことである。『変身』の深層に「騎士の戦い」の物語があることは先にみたが、表層にも戦いのモチーフが認められ、それを家庭内の権力闘争として読みうるだろう。その場合には、グレゴールのオイディプス夢は、父から勢力としての母を奪い取る戦闘行為として比喩的に解釈される。その上彼は、妹を自分の部屋に閉じこめて勢力の拡大を計ろうとする³⁹⁾。彼は父に「単独で」正面から戦いを挑むことはなく、いわば搦手から相手の力をそぐと同時に、その奪取したものによって、自己を強化しようとしている。その意味で彼は「毒虫」と言えるのである。

第2に、カフカ自身への自嘲と解釈しうるだろう。『変身』が3作品との対応を持つことは素材として利用すること、その「血を吸う」ことである。因みにグレゴールが Mist-

35) ヴェルナン/吉田敦彦前掲書 p. 168-9 参照。

36) V. 106.

37) Marianne Kroch: Oberflächen- und Tiefenschicht im Werke Kafkas, der Jäger Gracchus als Schlüsselfigur (N. G. Elwert) 1974, s. 110-139. カブト虫でありながら、羽根がない、つまり仮空の昆虫であることについては、ウラジミール・ナボコフ(野島訳):『ヨーロッパ文学講義』(TBS ブリタリカ) 1982, p. 330 参照。

38) Franz Kafka: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß (S. Fischer) 1953, s. 222.

39) V. 104.

käfer (食糞類コガネムシ)⁴⁰⁾とも呼ばれるのは同様な意味においてであろう。他者の排出物によって生きる虫との自己同一視になっているからである。

第3はフェリーツェとの関係についてである。『変身』の創作が彼女との文通による交際と平行し、そのことによって動機づけられていることはすでにふれた通りである。カフカは手紙を通して彼女の過去、家族、友人、職場等について詳細な報告を求め、彼女の日課、行動、感情までコントロールしようとする。手紙によって一種の同棲生活を企て、自己の生活を活性化させる一方で、作家活動の刺激剤とする。カフカは『判決』について、「この物語は間接的に彼女のおかげを受けている。」⁴¹⁾と書くが、『変身』についても同じことが言えるのである。

5

これまで『変身』には3つの作品と一つの騎士物語が重ね合わされ、そのことによってこの作品が輻湊し、難解になっているさまをみてきた。対応する3作品は全て性が罪の原因になり、性の否定的面が顕著に現われた周知の事件と、罪に密接な関わりを持つ事件⁴²⁾を扱っている。アダムとエヴァを一卵性双生児と見ることもできるので、その共通性を近親相姦にみることも可能であろう⁴³⁾。『判決』に続いてここでも結婚の可能性が問題にされ、そのモチーフはそれについて否定的判断が下されていることを示している。

グレゴールは、他の作品との対応から明らかなように、プロットの流れの中で絶えずさまざまな人物を演じ、その時々コンテクストで周囲の人物もそれに反応して——その逆も認められる——共演している。したがって作品の題名『Die Verwandlung』は、そのような連続的な演技的役割の変化をも意味していると言わなければならない。それを可能にしているのは動物への変身である、それも人間生活に深く関わる愛玩動物や家畜ではなく、言語であれ、身振りであれ、コミュニケーションなど考えられることもない動物への変身によって、グレゴールはいわばその中立性のマスクの下に演じしうるのである。しかしこの人物——まだそのように呼べるとして——が最後まで完璧な演劇を続けるには外部の客観的視点を避け、彼の視点に一致する語りの視点によって守られる必要がある。彼の内面、外界は可能な限り彼の感覚を通して語られる。そのために『変身』の世界は、彼の死後のエピローグを除けば彼の主観性によって恣意的に形成されていると考えられ、そこ

40) V. 101.

41) Franz Kafka: Tagebücher (S. Fischer) 1967, s. 226.

42) カフカの性に関する罪意識については、Bert Nagel: Kafka und die Weltliteratur. (Winkler) 1983, s. 278-98 参照。

43) 『変身』についてカフカは、「とりわけ嘔吐を催させる物語」、「きわめて官能的な仕事」と言っている。前掲書『Briefe an Felice』s. 117 参照。

では読み手に確固とした判断基準が得られない。そうした世界こそグレゴールの変身した謎の動物が存在しうる環境なのである。

『変身』は、ユダヤ、ギリシア、中世ヨーロッパの時代と文化、それぞれのジャンルを代表する3作品を取り込み、ヨーロッパの文学伝統を一身に体現しようとするかのようである。『判決』の際に用いられた創作技法が言語機能の徹底的駆使によって、『変身』においてさらに大規模に、精密に、十全に展開されている。

Zur Tiefenschicht in F. Kafkas „Die Verwandlung“

Takuma Kaneko

Im Werk „Die Verwandlung“ gibt es in der Tiefe Parallelen mit „Gregorius“, „König Ödipus“ und „Das Alte Testament (1.1-3.24)“. Diese Parallelität kann verglichen werden mit der Beziehung zwischen „manifestem Traum“ und „latenten Traumgedanken“, die Sigmund Freud als Begriffe im Werk „Traumdeutung“ behandelt. Bis 1912 hatte Kafka schon sicher die Freudschen Traumlehre gelesen und hat sie beim Schreiben seines Werks angewandt. Es scheint, daß Kafka, umgekehrt wie Freud, aus den drei Werken als Stoffen „Die Verwandlung“, die hier als „manifeste Traum“ gilt, konstituiert hat, während Freud von „manifestem Traum“ aus „latente Traumgedanken“ ausgedeutet hat. Deswegen kann sich die Tiefenstruktur des Werks „Die Verwandlung“ aus der Gegenüberstellung von beiden, Kafkas Werk einerseits und den drei Werken andererseits, schließen lassen. In „Die Verwandlung“ spielt der Held Gregor manche Rollen, z. B. Gregorius als Ritter und sogar als Kind im Kästchen auf dem Meer, Ödipus in der Katastrophenszene, dem das Blut auf die Wangen lief, und alle Geschöpfe, die auf der Erde leben, schwimmen und fliegen. Und dabei spielen auch seine Nebenpersonen nach den jeweiligen Beziehungen zu Gregor die Mutter des Gregorius, Iokaste, Eva, Adam usw.

Im Werk versteckt sich auch noch eine andere Handlung mit dem Leitmotiv des Kampfes, die von der oberflächlichen verschieden ist, wenn jene auch von dieser nicht ganz unabhängig ist. Die andere Handlung, in der Gregor als Kämpfer gegen den Vater auftritt, steht also der oberflächlichen entgegen, denn hier scheint sich Gregor opferfreudig um seine Familie zu sorgen. Daraus läßt sich schließen, daß die zwei gegenseitig scheinenden Handlungen seinen doppelzügigen Charakter spiegeln können. Aus den Parallelen von „Die Verwandlung“ mit „Gregorius“ und „König Ödipus“, die beide den Inzest als Motiv haben, kann man folgern, daß es um die Schuld des Helden gegenüber der Mutter geht.

Schließlich wird die Funktion der Verwandlung Gregors ins sprachlose Tier beschrieben. Die Kommunikationsunfähigkeit wirkt als Schaffensprinzip des

Werkes, nach dem sich alles nacheinander ereignet, und erlaubt, Gregor wie einen ausgezeichneten pantomimen darzustellen, der bedeutungsvolle Gebärden macht und manche wenn auch unwillkürliche tüchtige Mitspieler hat. In diesem Sinne ist er wie Raban in „Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande“ keine negative Figur, sondern ist vielmehr ein positiv Tatkräftiger, der Ereignisse in der Wohnung ausführlich berichtet und damit immer die Handlung der Erzählung ausbildet. Dadei kann man seine käferförmige Gestalt nicht übersehen, weil er ohne sie nicht so ein großer Schauspieler sein könnte.

In der Erzählung hat „Ungeziefer“ in bezug sowohl auf Gregor als auf den Dichter einen dreifachen Sinn.

Im „unruhigen Traum“ und in der Wirklichkeit der Erzählung scheint, daß Gregor unternommen hat, den Vater der Mutter und auch der Schwester zu berauben und sie für sich zu gewinnen und seine Kraft allmählich schwach werden zu lassen. Das ist gerade „der Kampf des Ungeziefer(s)“, den der Vater in „Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande“ nennt, denn Gregor kämpft nicht „für sich“ und er „sticht“ nicht nur den Vater, sondern er „saugt“ „... auch ... das Blut“.

Zweitens ist „Die Verwandlung“ aus den drei Werken als Stoffen geschaffen worden.

Drittens scheint die Erzählung aus Kafkas Liebesbeziehung mit Felice Bauer entstanden zu sein. Wie die Parallelität mit den drei Werken zeigt, lag sein heimliches Anliegen in etwas Sexuellem, das ihn wegen seiner Problematik von nun an lange quälte und ihn zuletzt auf die Heirat mit ihr verzichten lassen würde, was „das Urteil“, das nur einige Monate vor „Die Verwandlung“ geschrieben worden war, schon unglücksverweisend angekündigt hatte. Aus diesem Grunde, daß ohne Felice an diese Geschichte nicht zu denken wäre, hätte Kafka nicht nur über „Das Urteil“, sondern auch über „Die Verwandlung“ sagen können: „Ich verdanke die Geschichte auf dem Umweg ihr.“